

第9章 温泉・湯けむりの芸術文化的概要

第1節 美術文化との関わり

(事務局)

第2節 文学との関わり

(倉田 紘文)

第1節 美術文化との関わり

1 別府を描く

大正末期から昭和初期にかけて、都市文化が成熟していくなかで、美術はさまざまな形で人々の生活に取り入れられ、芸術家たちは広告、デザインといった商業分野に携わるようになる。別府では、美術は観光と深く結びつき、泉都別府の新たな魅力を国内外に発信した。

(1) 吉田初三郎とパノラマ地図

◆吉田初三郎の登場

昭和8年(1933)、イギリスの劇作家ジョージ・バーナード・ショウ(1856~1950)は「海から見る別府はまことに素晴らしい。自然が作り出した最高の芸術だ。上陸して美しい別府観を失いたくない。」と船上記者会見において述べている。この頃別府は、世界周遊観光船の寄港地になっており、外国からの著名人が多く来別していた。

このバーナード・ショウの物理的な視線に対して、はるか上空から別府を眺める人物がいた。絵師吉田初三郎(1884~1955)である。初三郎は、大正から昭和初期にかけての観光の黎明期に、商業資本の依頼を受けて国内の各都市、名所、観光地にとどまらず、樺太、満州、朝鮮半島、台湾なども訪れ、正確な地形図と現地での綿密な踏査写生によって2,000点余りの名所図絵及び鳥瞰図を残した人物である。主題となる場所を画面中央部に詳細に描き、その周辺の地形を極端に湾曲させ、見えないはずの場所まで誇張して描き込む「初三郎式絵図」は、観光地の案内図あるいは都市の近代化の記録として、たいへんな人気を博した。

京都出身の初三郎は、当初、友禅の図案士を志していたが、その後関西美術院で洋画を学び、さらに商業美術の世界に転じた。その契機は、「フランスの著名な画家がポスターや壁画、図案広告を描くように、日本の洋画壇で民衆のための画家になれ。」という洋画家かのこぎたけしろう鹿子木猛郎の助言であった。パリ万国博覧会を体験し、商業美術の隆盛を目の当たりにした鹿子木は、日本ではまだ新しいこの分野において初三郎がその才能を発揮できるのではないかと考えたのである。

恩師の薦めにより、初三郎は百貨店の壁画や博覧会会場の天井画のほか、室内背景画などを手掛けていたが、大正2年(1913)、初めて京阪電鉄の電車案内図を制作し、次いで大阪商船会社より別府大阪航路沿線の鳥瞰図の制作を依頼されるなど、本格的に鳥瞰図絵師としての道を歩み始める。

◆別府市鳥瞰図と油屋熊八

この年、別府町(当時)は、初三郎に鳥瞰図の制作を依頼している。別府町では、明治42年(1909)に町役場に温泉係(2年後、課に昇格)が設置され、積極的な観光宣伝活動が行われた。鉄道の開通、駅の開業、観光客船の就航といった公共交通網の整備・拡大に加え、公衆浴場の新設が相次ぎ、西日本随一の観光温泉地として確固たる地位を順調に築きつつあった。



図9.1.1 《別府温泉市街之圖》(別府市西海印刷社)

現在、初三郎が別府を描いた鳥瞰図の原画は、亀の井ホテルと別府市美術館が所蔵している。いずれも別府町が市制施行し、別府市となった大正13年（1924）に制作されたものである。前者は初三郎から亀の井ホテル社長油屋熊八（1863～1935）へ、後者は熊八とともに別府の観光に貢献した梅田凡平（1889～1929）に熊八が贈呈したものである。両図とも構図はほぼ同一だが、亀の井ホテル所蔵の原画では、近景中央部に同ホテルの敷地を広くとり、その周辺に系列の食堂、別荘、支店などが描かれている。共通するのは、主要な観光名所である地獄には目立つように赤色で、温泉、神社、駅、公園、山などの名称は白色で名称が縁どられている。名所と名所を結ぶ道路にはバスが走り、鉄道は赤線、客船の航路は白線で表現され、中景には青々とした別府の山々が広がり、遠景には韓国の釜山、台湾が見える。

亀の井ホテル社長油屋熊八は、別府の宣伝と観光開発に尽力した人物であり、初三郎とは大正2年（1913）、別府町が初めて鳥瞰図の制作を依頼した年に出会い、その後、親しく交流する。いち早く初三郎の才能を見抜いた熊八は、経営するホテルはもちろん、別府を宣伝するために初三郎を積極的に起用する。例えば、昭和2年（1927）に制作された亀の井ホテル発行のパンフレット「別府温泉御遊覧しをり Pocket Guide to Beppu Hot Springs－日本第一の温泉別府亀の井ホテル御案内」は初三郎の鳥瞰図が原画となっている。その他「別府温泉御案内」〔大正6年（1917）／別府町、亀の井旅館他〕、「理想の楽土 別府温泉」〔大正6年（1917）／和多田印刷〕、「別府温泉地獄めぐり 別府市を中心とせる東九州の交通」〔大正13年（1924）／別府宣伝協会・亀の井ホテル他〕、「別府温泉遊覧御案内（泉都別府を中心とせる名所交通図）」〔昭和元年（1926）〕、「別府温泉 別府温泉鳥瞰図」〔昭和5年（1930）／別府市役所他〕、「日本八景名所図絵 日本新八景別府温泉御案内」〔昭和5年（1930）／『主婦の友』8月号付録〕などが初三郎の鳥瞰図をもとに制作されている。

最も古い別府の観光パンフレットは、大正13年（1924）～昭和3年（1928）に発行されたもので、初三郎の原画から宣伝用パンフレットや路線・沿線図と名所が一緒になった横長の折れ本形式の観光地図が印刷され、別府を訪れた観光客にとって実用的かつ旅の記念品となっていた。

◆泉都別府の広報活動

初三郎はこうした鳥瞰図のほか、イベントの広報や集客においても活躍している。昭和3年（1928）に熊八が始めた地獄めぐりの定期観光バスは、我が国初のバスガイドの導入で衆目を集めた。初三郎は「別府近郊高級乗合自動車遊線地獄めぐり」や別府を起点とする耶馬溪の日帰り観光を宣伝する「耶馬溪回遊高級乗合自動車」のポスターを作成している。また、昭和6年（1931）、亀の井ホテル創業20周年を記念して開催された「全国大掌大会」のポスターも作成している。

さらに初三郎は商業美術の第一人者として博覧会事業にも積極的にその手腕を発揮している。大正末期から昭和前期、国内各地で中小の博覧会が開催されたが、別府においても昭和3年（1928）4月1日～5月20日に市制5周年記念中外産業博覧会が開催されている。このとき、ポスター及び会場案内図の制作に起用されたのも初三郎であった。横に長い「初三郎式絵図」の中央には第1会場の別府公園、第2会場の浜脇埋立地に、美術館を始め、博覧会本館、温泉館、風景館、災害予防館、水族館、農林機械電気・発明・婦人子供館などの別館、そして満州、朝鮮、台湾、北海道、南洋館などの特設館が大きく描かれ、町の各所に博覧会を祝うアーチが建てられている。特に温泉館や電気館に人気が集まり、80万人を越す入場者があったという。

博覧会とは、その都市の文化や伝統、最先端の技術と産業を国内外に示すきわめて重要な場であり、初三郎が泉都別府の観光と産業の宣伝に一役買ったことが分かる。

◆観光ユートピア

かつて鳥瞰図は通俗的との批判があったものの、現在では都市や時代の貴重な証左となっている。

以下の文からは吉田初三郎が慧眼の士であったことが分かる。

鐵路成り、鐵橋成り、^{トンネル}隧道成り、更に自動車の、めまぐるしくも、さかんなる様子を見るにつけ、私は

こゝ五十年を出でずして、必ず飛行機萬能の時代の來るべきを確信してゐる、其時に於て曾て地上に遺されたる交通状態を如實に物語るものは、我が鳥瞰圖にあらずして何ぞ。

(「如何にして初三郎式鳥瞰圖は生まれたか」『旅と名所』創刊号 昭和3年(1928)6月)

はるか上空に視点を据え、列車が通る鉄道と駅、客船が行き交う航路、観光名所を結ぶ道路などの交通網と豊かな自然景観が融合した初三郎のパノラマ絵図は、交通機関を最大限に利用した別府の観光開発の功労者油屋熊八との出会いによって、別府温泉の名を一躍有名にし、別府を観光ユートピアとして広く国内外に紹介し、定着させる極めて重要な役割を果たしたといえる。

(2) 近代洋画家たちの眼

温暖な気候と豊かな物産、そして恵まれた風光を誇る別府は、多くの画家の感興を誘い、格好のモチーフを提供してきた。豊富な温泉と、海や山の景観に恵まれた別府には、古くから数多くの画家たちが訪れ、特に明治・大正時代以降、交通の便が開けてからは、さまざまな画家たちが絵筆を取り、それぞれの別府風景を描いてきた。

◆小出楯重(1887~1931)

小出楯重は、生来より病弱であったため、関西を離れることは少なかったが、たびたび別府を訪れている。

大正9年(1920)7月、高浜虚子、山崎楽堂、勝本清一郎、大道弘雄らとともに初めて来別している。地獄めぐりをし、柳原白蓮を伊藤伝右衛門の別荘赤銅御殿に訪ね、その後中津、道後温泉に遊ぶ。この旅程での見聞を書いた大道の紀行文「別府 附耶馬溪、道後」(全16回)の挿絵を大阪朝日新聞に連載している。これは、楯重の軽妙かつ洒脱な挿絵が人々の目に触れた嚆矢であり、以降、新聞・雑誌の挿絵を手掛けるようになる。

フランス留学から帰国後の大正12年(1923)夏には、再び別府を訪れ、『週刊朝日』夏期特別号に《別府の砂湯》と題する挿絵を寄稿している。最後の訪問となる昭和5年(1930)7月には、家族とともに訪れ、16ミリ映画「別府行紅丸にて」を自ら撮影・編集している。わずか二泊三日の短い期間であったが、昼下がりの別府湾を描いた《海》(東京国立近代美術館所蔵)がある。手すりのある岸壁から別府湾を眺めた構図で、白波が立つ海には舟が浮かび、その背後には深緑の高崎山ともくもくとした褐色の雲が素早い筆致で描かれている。

◆中村研一(1895~1967)

昭和24年(1949)3月10日、観光切手「別府」が発行された。諸外国に対し観光立国をめざすべきとの機運を背景とした通信省(現 日本郵便)の企画「名勝地切手」によるもので、戦後初の観光切手であった。

原画の制作を依頼された中村研一は、福岡県出身の洋画家で、東京美術学校では岡田三郎助に師事し、フランス留学では、堅実な写実と剛直な作風、光と影を的確に把握する技術を身につけた。昭和5年(1930)には、最高賞である帝国美術院賞を受賞している。さらに帝展の審査員を歴任するなど穏健な具象画家として知られていた。

中村は昭和23年(1948)4月、別府を訪れ、精力的にスケッチし、それらをもとに別府湾から望む高崎山を題材に選んだ。原画のひとつ《高崎山》(別府市美術館所蔵)は、のどかな田園風景を前景に高崎山と別府湾に入港する汽船を描いている。手前に棚田、遠景に高崎山と別府湾を配した構図は、高崎山を背景に広々とした別府湾に汽船が浮かぶ切手の絵柄とはかなり



図9.1.2 中村研一《高崎山》 昭和23年(1948)
油彩・キャンバス/別府市美術館



図9.1.3 観光切手「別府」
昭和24年(1949)発行

異なっており、中村が平凡な図柄にならないように題材や構図に苦心した様子がうかがえる。

観光切手「別府」は、葉書用の赤色の縁どりの2円と封書用の緑色の縁取りの5円の2種が発行された。当初、別府局と東京の麻布局のみで発売され、別府局へは2円切手が60万枚、5円切手が80万枚配布された。翌年9月4日に全国発売されたものの、その後、「名勝地切手」シリーズは様々な事情で打ち切りとなり、「別府」が最初で最後の観光切手となった。

◆梅原龍三郎（1888～1986）

大正9年（1934）2月、梅原龍三郎は初めて鹿児島を訪ね、大正15年（1940）まで九州の風景を描いた。火山を偏愛した梅原は、山のもっとも美しい姿を見るために、ホテルや別荘の眺めの良い部屋をアトリエにし、その雄大な姿を鮮烈な色彩と大胆な筆触で描いた。

別府では、昭和12年（1937）、北浜の花菱旅館（現 花菱ホテル）に一月の間宿泊し、スケッチのほか、《別府港朝靄》《朝靄》《高崎山》などの作品を制作している。《高崎山》では、早春の斜陽を受けた高崎山が眼前にどっしりと存在する実感をともなって描かれている。自然を凝視し、その感動を率直に表現する細やかな色彩への配慮とともに、刻々と変化していく光の中に予期しない自然の美しさをとらえようとした画家の姿が感じられる。この頃より日本画の顔料である岩絵具を油で練って用いる技法やキャンバスではなく間似合紙を支持体に用いるなど、後に東洋と西洋を融合した「梅原様式」を確立する。

◆伊谷賢蔵（1902～1970）

伊谷賢蔵は、昭和28年（1953）春、長男純一郎が霊長類学者として大分県に赴任したのを機に、毎年年末から1月にかけて九州に写生旅行に訪れ、別府、湯布院、城島高原方面から由布岳と鶴見岳を、また飯田高原から九重連峰を訪れ、阿蘇、あるいは鹿児島へといたるコースをたどっている。

伊谷が触発したのは、郷里鳥取の大山や本州の山とは異なる複数の火山群が交錯する九州の峨峨たる山嶺であった。地の底から盛り上がるような山塊と堂々と迫ってくる山肌の一瞬の表情をとらえ、自然の美しさや雄大さを描いている。《別府朝焼》（別府市美術館所蔵）では、街が未だに薄明りの中にあるとき、山々の頂きが赤々と太陽に照らし出された早暁の印象的な瞬間を描いている。街を包む灰褐色と山肌に映じる自然の鮮烈な朱の色彩対比に、カラリストの片鱗が垣間見える。



図9.1.4 伊谷賢蔵《別府朝焼》 昭和30年（1955）油彩・キャンバス／別府市美術館

◆権藤種男（1891～1954）

権藤種男は、官展出品画家として活躍し、大分県美術協会の初代会長を務め、地元の美術振興に貢献した。戦災跡の大分市街や、高崎山を遠望する大分河畔などを穏健な写実で描写し、陽光や大気の効果を生かした清澄な作品を多く残している。

《別府遠望》（別府市美術館所蔵）は、戦後間もない頃の作品で、横長の画面を有効に使い、ゆったりとパノラマふうの早春の山々と町並、そして別府湾が描かれている。構図の妙と清新さを感じさせる空、山、海の色彩が呼応し、この作品の大きな魅力となっている。

こうした別府風景は、湯けむりとともに平和を象徴する自然の景観として画家の心を癒したことであろう。



図9.1.5 権藤種男《別府遠望》 制作年不詳 油彩・キャンバス／別府市美術館

2 別府を拓く

一般に、美術作品は美術館や愛好家による蒐集、所蔵が多い。別府市では、美術館が開館する以前よりホテルや旅館において宿泊した画家たちの作品が所蔵、展示され、その中には今日高く評価されている著名な画家の作品も少なくない。宿泊施設が美術作品を鑑賞できる場を提供するということは、国内だけではなく、外国人観光客の集客をも視野に入れた国際的かつ高級な観光施設としての位置付けを目的としていた。

(1) 二科会

大正末期から昭和前期にかけては、中央の美術団体が地方への巡回展を開催し始めた時期にあたる。二科会、独立美術協会、塊樹社、太平洋画会などが九州において展覧会を開催している。

大分県では、戦後、観光立国の気運の高まりを受け、海上・陸上の交通整備とともに、県内の観光資源の掘り起こしが活発化した。別府市では昭和25年（1950）7月、いわゆる「別府法」と呼ばれる「別府国際観光温泉文化都市建設法」が制定され、日本における国民生活文化と国際親善に重要な役割を果たす都市として位置づけられた。このように昭和20年代は、今日の観光都市としての基盤が固められ、昭和30年代に入ると急速に観光開発が行われ、観光客誘致のための宣伝事業が盛んになった。

文化面においては、昭和33年（1958）より美術団体展の誘致が活発化し、同年1月、二科会第42回展が大分市において開催されている。当時、二科会はそれまでの美術団体が扱わなかった漫画部を皮切りに、子供写真部、商業美術部などを新設し、「二科大分展」開催に際しては、主催者側が募集した「二科ジュニア展」の審査を行い、同時陳列するなど、美術の大衆化を率先してはかり、閉鎖的な画壇を広い世間へと押し出そうとしていた。

二科会は、大正3年（1914）10月、日本洋画の革新と創造を目指す新しい在野美術団体として、山下新太郎、有島生馬、石井柏亭、坂本繁二郎、梅原龍三郎、津田青楓、小杉未醒、斉藤豊作、田辺至、柳敬助、湯浅一郎らによって結成された。彼ら印象派以後の新傾向の画家たちは、文展第二部の洋画部内における審査に不満を抱き、第一部の日本画に倣い、新派旧派の二科に分ける運動を興したものの、容れられなかった。そのため、二科会を新設し、文展に対して明確な決別を表明した。二科会結成と期を同じくして、上野竹之台陳列館において、第1回展が開催され、文展アカデミズムに飽いていた人々の好評を得た。

同会結成当初の大正期には、会員として、安井曾太郎、森田恒友、正宗得三郎、熊谷守一、中川紀元、小出楯重、藤川勇造、アンドレ・ロート、ロジャー・ビュシエールらが参加し、萬鉄五郎、関根正二らも活躍した。昭和に入ると、二科会から独立美術協会、一水会が、戦後は、行動美術協会、二紀会、一陽会が分派し、多様な展開を見せた。二科会においても、発足当初は洋画部のみであったが、後に彫刻、工芸、写真、商業美術、理論、漫画の各部を擁し、その長い歴史は日本近代美術の一翼を担ってきたといっても過言ではない。

◆東郷青児（1897～1978）

戦後、二科会を率いた東郷青児は、「時代が変われば芸術家も変わる。美術団体展は本質的には物を売る商売と少しも変わらない」という姿勢をとり、新しい経営法、従来の美術団体の概念を逸脱する運動法を実践した。画家としては、キュビズムなどの理知的な様式を下敷きに、都会的な感覚と甘美な抒情性が漂う洗練された世界を確立し、わが国の前衛絵画のリーダー的な役割を果たした。

実はこの東郷の1,000号の大作《山は呼ぶ》が鉄輪の老舗おにやまホテルのロビーを飾っている。初代社長宇都宮則綱氏の依頼によって制作され、同ホテルが設立された昭和39年（1964）当初は食堂に展示されていた。東郷は、昭和25年（1950）から昭和35年（1960）にかけて全国各地に新設された有名ホテルのロビー、有名デパートの壁面、喫茶店の包装紙などのデザインを手掛けていることから、本作品はこの頃に描かれたものと推定される。

モノトーンを基調とした本作品では、幾何学的に再構成された別府の山々を背景に、中央の白い湯けむりを見守るようにふたりの少女たちが腰を降ろしている。制作時期と重なる昭和38年（1963）に大分県が公募し、翌年

決定した観光キャッチフレーズの中に「山が呼ぶいでゆが招く大分県」という入選作がある。東郷はこうしたキャッチフレーズに着想を得たとも考えられる。宇都宮は油屋熊八とともに別府観光の発展に貢献した人物で、「この作品をホテルの目玉にしたい」という熱い思いを持って東郷に作品制作を依頼した。しかし、作品そのものは商業的な雰囲気とはかけ離れた、優美でロマンティックな雰囲気を漂わせている。

◆おにやまホテルの試み

おにやまホテルは、東郷の《山は呼ぶ》をはじめ、二科会第50回展出品作と二科会に所属する画家たちの作品を所蔵している。世間の目が海外に向く中で、外国人観光客を意識して特に洋画を購入し、ホテルの核としたのである。当時、国際ホテルを目指していたおにやまホテルにとって、海外でもその名を知られた東郷の作品や、二科展において受賞歴のある画家たちの作品、また数々の著名な画家を輩出してきた美術団体展の出品作を所蔵し、展示するということは高級ホテルとしての品格を高めるために必要不可欠なことであった。

二科会第50回展は、昭和40年（1965）9月1日～20日まで東京都美術館にて開催され、引き続き、名古屋、大阪、京都、広島、別府、福岡、鹿児島、岡山、新潟の9都市において開催された。創立50周年を記念して総理大臣賞及び記念賞が新設され、入選者数は絵画471名、彫刻61名の計532名であった。

「二科別府展」は、翌昭和41年（1966）1月18日～20日の3日間、別府国際観光会館3階ホールにおいて開催された。当時、「二科選抜展」と報道されているように、東京会場より規模を縮小し、東郷の作品を始めとして、吉井淳二、北川民次、寺田竹雄、野村守夫らの絵画67点と、笠置季男、高須賀桂、野村嘉光らの彫刻3点、秋山庄太郎、林忠彦、大竹省二、早田雄二、岩宮武二らの写真32点が展示された。会期中、東郷が来場し、自ら作品について観客に解説したという。

大分県内では、すでに昭和33年（1958）に二科会第42回展が大分市において開催されていたが、別府市では初の開催であった。別府市が開催地として選ばれた理由は定かではないが、おそらく昭和38年（1963）4月に美術展の開催が可能な施設、別府国際観光会館が開館していたこと、以前から別府を訪れていた東郷の意向、そしておにやまホテルという有力なスポンサーが得られたことなどがその要因であったと推察される。

二科会第50回展を主催したおにやまホテルは東郷を介して同展出品作と二科会会員の新作約30点を購入し、その後、「二科会審査員新作展」と銘打って展覧会を催している。また「芸術院会員東郷青児画伯 大壁画展」も並行して開催し、先に購入していた《山は呼ぶ》ほか2点をともに一般公開している。ホテルが美術展を主催し、展示作品を購入するといったことはそれまで別府においては前例がなかったという。

このように、おにやまホテルは美術作品を購入し、展示することによって、高級ホテルとしての地位を築こうとした。つまり、ホテルにとって「美術」はホテルの格を左右する最も重要な手段であったといえる。

この二科第50回展以降、現在にいたるまで二科展は別府市では開催されていない。二科結成50周年にあたる記念すべき展覧会が別府市に招致された経緯については明らかではないが、早くから別府の観光資源の開発、観光事業の振興に努め、「観光別府」の最大の功労者のひとり目された宇都宮氏の尽力によるものであり、東郷への積極的な働きかけと熱意、そしてその先見性を抜きには成立しえなかったであろう。

地方の一ホテルが国内外で知名度のある美術団体展のスポンサーを務め、さらに同展にゆかりのある高名な画家たちの作品を購入し、展覧会を主催するという斬新な試みは、オープン間もないおにやまホテル、ひいては泉都別府を宣伝する格好の材料となったといえる。

（2）国際芸術フェスティバル

◆概要

平成21年（2009）4月11日、別府の街を舞台に、別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」が6月14日までの2か月間にわたって開催された。①国際的に活躍するアーティストを招聘し、文化芸術の振興につなげ

る②地域資源と現代アートが融合したアートツーリズムによる観光の振興と地域の活性化、多様化を図る③地域の将来を担う人材を育成する を目的とし、さまざまなイベントを通して、泉都別府の魅力を国内外に情報発信しようというものである。

非営利活動法人 BEPPU PROJECT が地方都市ではあまりなじみのない現代アートに触れる機会を提供しようと、平成17年（2005）より準備を始め、その集大成としたのが、現代美術・演劇・音楽を含むこの国際芸術フェスティバルである。市民団体や学生を含めた若い世代が中心となり、ボランティアとして協力し、運営に参加した。

「混浴温泉世界」というユニークな名称について、総合ディレクター芹沢高志は次のように述べている。

大地から湯が湧きだし、窪に溜まる。

それは誰のものでもない。

人はそれを慈しみ、自発的に守り維持する。

そして、ここに住む人も旅する人も、男も女も、服を脱ぎ、湯につかり、国籍も宗教も関係なく、武器も持たずに丸裸で、それぞれの人生のあるときを共有する。

しかし、つかりつづけければ頭がのぼせ、誰もそのままではいられない。

入れ替わり湯から上がり、三々五々、ここを去っていく。人は必ずここを立ち去り、再び訪れる。

ゆるやかな循環。

（「混浴温泉世界」コンセプト・ステイトメントより）

つまり「混浴温泉世界」とは、別府を内の人間（地域住民）と外の人間（旅行者）とのコミュニケーションによって作られる移入文化の街ととらえ、さまざまな場所でアーティストが創作活動を行うことによって、人と人、地域と地域、文化と文化が結びつき、より密なコミュニケーションを通して、日常とアートが混然一体となって緩やかに循環する世界を意味する。

アーティストたちは、美術館やギャラリーといった閉じられた空間から飛び出し、実際に別府に滞在し、人、街、景色、歴史、文化などに触れ、自らが選んだ場所で、自身の体験とその場所の特色を生かした創作活動を行った。その結果、作品の制作や展示の過程において、文化的背景や社会的背景を異にする人々の間に横の連帯が生まれ、新たな地域作りへの契機となった作品や、鑑賞者が制作に参加することができる作品、鑑賞者の反応によって変化していくような作品が市内各所に現れた。

◆アートゲート・クルーズ

フェスティバルの核となる「アートゲート・クルーズ」は、海外より参加した8名のアーティストがそれぞれ3つのエリア—湯けむりの町鉄輪温泉地区、海上交通の要別府国際観光港、古い街並みと細い路地を残す中心市街地—において作品を制作した。鑑賞者はパスポート（チケット）と地図を片手に、30か所に点在する作品を探しながら街を散策するという構成になっており、ひとつひとつの作品が鑑賞者を新たな精神の旅へと誘う別世界の門となっている。

いずれも多国籍、多文化を生きるアーティストたちを招聘している。少数派の鋭い視点から社会へメッセージを送り続けるアデル・アブデスメッド（アルジェリア生まれ、アメリカ在住）、「差異」をテーマに静謐かつ力強い表現を生み出すラニ・マエストロ（フィリピン生まれ、フランス在住）、場所との対話



図9.1.6 「混浴温泉世界」ポスター



図9.1.7 サルクス（波止場神社）

を重視するホセイン・ゴルバ（イラン生まれ、日本在住）、作品と鑑賞者の間に生きた関係性を創り出すサルキス（トルコ生まれ、フランス在住）、文字と音のみの動画をインターネット上で発表するチャン・ヨンヘ工業（韓国生まれのチャン・ヨンヘとアメリカ生まれのマーク・ヴォージュのユニット、韓国在住）、「這う」という人類共通の行為を通して場所の持つ力をあぶり出すジンミ・ユーン（韓国生まれ、カナダ在住）、織物の図柄を大画面に描くマイケル・リン（東京生まれ、中国在住）、女性の強さをテーマに自らを偶像化するインリン・オブ・ジョイトイ（台湾生まれ、日本在住）らである。

例えばサルキスは、歓楽街にあるひっそりとした神社を制作場所を選び、身捨てられたような場所を作品によってより新鮮で生き生きとした別の空間に変えた。四季の変化が描かれた64枚の天井画と対になるように床に64個の水を張った白い器が置かれ、その器の水は移り変わる自然を映し出している。時間の経過とともに消えていく水は、見えない時間を刻印するというインスタレーションである。作品を構成するさまざまな要素の集合が、神社という特定の場所と影響し合うように配置されているため、鑑賞者は身体ごと別の空間の中に入っていきような感覚になる。

ホセイン・ゴルバは、築百年を超える旅館の和室に色鮮やかな布を数枚敷き詰めることにより、差し込む光の変化を味わう空間を創りだした。市中心街をひたすら這いまわったジンミ・ユーンは、別府の風景を低い目線から眺めたビデオ・インスタレーションを発表し、別府観光港にはマイケル・リンによる波と花をモチーフとした幅20m、高さ4.5mの巨大壁画が出現した。

◆わくわく混浴アパートメント

「わくわく混浴アパートメント」では、国内各地から132名の若手アーティストが参加し、古い空きアパートで共同生活を送りながら作品を制作した。アーティストたちの滞在期間はそれぞれで、メンバーは毎日入れ替わるため、アパートの内部は日々変化していく。アパート全体が展示空間となっており、鑑賞者は自由に廊下や階段、各部屋の作品を鑑賞し、その制作過程や展示風景も見ることができた。さらに、園児たちとのワークショップの開催や住民が参加した映像作品が制作されるなど地域に密着したアートが生まれた。

◆関連プログラム

その他、ボランティアガイドによる路地裏散策ツアー「ベップナビゲート」が行われ、「ベップダンス」や「ベップオンガク」では、露天風呂、商店街、公民館、港、神社などが劇場空間に変わった。

アーティストが地域に入り、インスタレーション、ワークショップ、パフォーマンス、コラボレーションといった、直接人と人、人と場所とを結びつける創作活動を行うことによって、それぞれの地域の特色、歴史、文化、景色などが再発見され、アートとともに場所の持つ新たな魅力が浮き彫りとなった。

会期中、およそ9万2千人が訪れた「混浴温泉世界」はまだ始まったばかりだが、自然の芸術である温泉と最先端の芸術活動との融合が泉都別府の観光の振興につながるアートツーリズムの新たな可能性を示した。



図9.1.8 ホセイン・ゴルバ
（富士屋 Gallery 一也百）



図9.1.9 平川渚 制作風景
（清島アパート）



図9.1.10
ベップダンス「No Matter (入浴する女たち)」
（いちのいで会館景観の湯）

第2節 文学との関わり

1 湯けむり景観について

「文化的景観 別府の湯けむり景観保存計画」のその主たる目的の地域は〈鉄輪地区〉と〈明礬地区〉ということである。別府の温泉についての文献には、『豊後風土記』（速見郡）、『三代実録』（聖武天皇と別府の温泉）、『和漢三才図会』（別府村・有温泉）、『鶴見七湯廻記』解説書（豊後国速見郡）、『古事類苑』（地部）など沢山ある。しかし、古代のものには「湯けむり」の言葉はほとんど出てこない。特に「文学との関わり」となると難しい。

別府温泉を詳しく解説している『別府温泉湯治場大事典』（安部巖著・創思社出版）には、「お湯は昔から」に始まっている色々な書の紹介がある（注：原文ママ）。

『伊予国風土記』、貝原益軒『豊後紀行』、古川古松軒『西遊雑記』、伊藤常足『大宰管内志』、脇蘭宝『函海漁談』だがこれらの本にも温泉についてはよく書かれているが、湯けむりについての話はあまり出てこない。そして同書はそれにつづいて「湯突やぐら」（明治期）、また「温泉と観光」（大正期）があり、その頃から「湯けむり」の言葉がいろいろな本や物語に出はじめる。

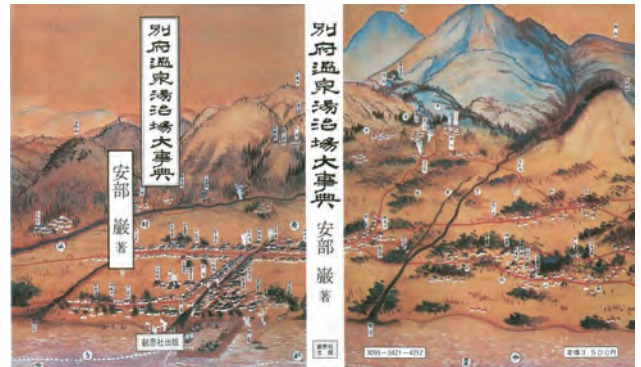


写真9.2.1 『別府温泉湯治場大事典』（安部巖著）

2 別府を訪れた文人

(1) 明治期

徳田秋声は別府滞在生活の模様を『浴泉記』などに自伝的小説として執筆している。その時のことを当時、別府から「別府温泉の印象」のアンケートを求められ、次のように返答している。

明治31年頃の2月ころと思います。(略) 何よりも湯の豊富なのに驚きました。観海寺？川より、鉄輪・明礬の湯、それから海地獄など巡り、他に数のない温泉地帯だと思いました。

とあるが、「湯けむり」の文字は見つからない。

心境に新しさを求めて別府に長期滞在した徳富蘆花は、明治33年に自伝的小説『思い出の記』を発表した。その中に別府を舞台とした場面を取り上げているが、彼が実際に別府を訪れたのは大正2年であり、物語は空想で描いたもの。蘆花は坊主地獄、鉄輪の地獄地帯をめぐり、別府の浴場で心の傷を癒したという。だが、ここにも湯けむりは出てこない。



写真9.2.2 徳富蘆花（国立国会図書館蔵）

(2) 大正期

田口掬汀は菊池幽芳らと共に、明治から大正期にかけて大衆文学作家として活躍した。大正2年、別府を訪れた掬汀は2年後の4年から5年にかけて大阪朝日新聞に『ふたおもて』の連載小説を発表。

車を連ねて地獄見物にも出かけたのであるが、観海寺から八幡地獄、堀田温泉、新別府、海地獄、明礬とめぐって鉄輪へ向う。

これはその場面の要約である。ここにも湯けむりの言葉はない。

高浜虚子が別府に最初に来たのは大正9年7月。その宿は鉄輪の富士屋であった。

汗人に一山越えて一温泉有り 高浜虚子
湯煙を吹き払ふ時風涼し 同

ここでははっきりと「湯煙」と詠われている。

(3) 昭和期

また高浜虚子は昭和2年7月に「別府温泉」の旅をしており、その折りの『二三片』の文章には海地獄を見て

濛々たる白煙は熱湯池から立ち上ってゐた。此方より風吹けば彼方の岸になびき、彼方より風吹けば此方の岸になびく。その白煙の隙から後ろの山の翠色を仰ぐのも又風情がある。

と、自然のたたずまいに見とれている。そして鉄輪温泉に着いても、「そこでちょっと以前泊まったことのある富士屋の主婦^{おかみ}さんを訪ねた」とある。8年前へと思いをもどす。温泉の旅情のゆかしさである。



写真9.2.3 海地獄

昭和6年10月、与謝野鉄幹・晶子夫婦が別府を訪れている。その時の晶子の歌に

与謝野晶子

この世なる豊の別府の海地獄
瑠璃の波より白雲ぞ湧く

と、湯けむりを「白雲」と詠っている。

この他にも森鷗外『小倉日記』、菊池幽芳『百合子』（以上松本義一著『大分文学紀行』）、川端康成『続千羽鶴』、徳富蘆花『死の陰に』（以上小野茂樹著『大分県と文学』）などにも鉄輪や明礬の景に魅せられた場面が登場する。

ここには自然景観と共にある素敵な湯治場としての別府、更には景観と観光と文化が結びつく別府。そしてこれを根本にその土地の人の情けに触れることの出来る「魅せられる別府」の姿がある。このことを今こそ「湯けむり景観と文学」に発展させてゆきたい。

3 現在の湯けむりと文学（昭和から平成へ）

尾上紫舟

鶴見岳降りおろす雪に凝りたらむ
里の湯煙かたまりて立つ



写真9.2.4 郭沫若の碑（『大分の文学碑めぐり』より）

湯煙の中なる蟬に法師蟬

中村汀女

郭沫若

彷彿但丁来 血池水在開
奇名驚地獄 勝境擅蓬来
一浴宵増暖 三巡春満懷
白雲千載意 黄鶴為低回

これらの作品はみな昭和の作である。すでに湯けむりの語も定着して、あたりの景色と溶け合って美しく感じられる。中国の文学者で詩人の郭沫若の五言律詩は、学術視察団長として訪日され、別府に泊まった時のもの。地獄や湯けむり（白雲）が別世界のような感動でつづら

れている。鉄輪の十万地獄公園内に詩碑となっている。

昭和になって掘削を積極的に行った結果、沸騰泉や噴気が湯けむりとなって立ちのぼっている。そしてその湯けむりも鉄輪・明礬地区が全体の約半数を占めているという。まさに湯けむり景観の実態がここにある。

鉄輪温泉の町おこし団体である「愛耐会」が発行した『湯けむりの里』（吉本秀俊著・昭和61年刊）の、「鳥瞰図」－美しい別府の“顔”－の一章を引いてみよう。

ゆう出量日本一を誇る別府市には八ヶ所の温泉群がある。いわゆる別府八湯。その中で最も温泉地らしく感じるのは市の北西部に位置する鉄輪温泉だ。至る所から湯煙が立ち上り、まさに「泉都別府の顔」と言える。湯けむりの下、温泉はわき出る。古い歴史と郷愁の風物詩、新旧の観光施設、客や住民の喜怒哀楽の人生ドラマ……。この地区はいま、国民の観光意識の多様化に対応、再生へのまちづくりにも積極的に取り組んでいる。鉄輪温泉は湯煙抜きでは描けない。



写真9.2.5 湯けむり展望台よりの鉄輪・明礬の湯けむり

この素敵で見事な一文こそ、「湯けむり景観の価値の認識」そのものではなかろうか。湯けむり展望台も紹介され、「鉄輪のスケッチ」の副題の付く優れた書物である。

他に「明礬温泉」－湯の花におう谷間－など、湯けむりの里を讃えた多くの章が満載されている。

『鉄輪』（藤原新也著・新潮社・平成12年刊）という自伝小説がある。湯けむりの街を舞台に少年期の情景をつづり、それに多くの写真も収められている。『鉄輪』は、門司港で旅館を営んでいた一家が破産し、無一文で知らぬ土地の鉄輪温泉に向かう場面から始まる。その一章に「湯気」がある。

私たちは父が前もって見つけておいた貸間のある家の方に向かって歩きはじめる。鉄輪の町全体が見渡せる場所を通りかかったとき、私たちは立ち止まり町を眺めた。不思議な光景だった。月明かりに照らされて、町のいたるところから、もくもくと青白い湯煙りが上がっていた。

「……地獄みたいやね」と私は言う。

「温泉は地獄じゃのうて…」と父は言う。

「そう、天国みたいに、ええところなんよ」と母は言葉を添えた。

しばらくの沈黙があって、それから私たちはまた歩きはじめた。

人生の哀しみをしみじみと両親と話しながら、湯けむりの街に溶け込んでゆく。ここでも湯けむりの景観が人の心を和らげてくれている。



写真9.2.6 『鉄輪』（本文40～41ページ）

その湯けむりをテーマにして、鉄輪町おこし「愛酎会」が〈鉄輪俳句筒湯けむり散歩〉の俳句を募集し、湯治客や観光客、そして別府市内の俳句愛好家に作句を呼びかけている。

日本の美しい四つの季節を讃えた道元禅師の有名な歌がある。

春は花夏ほととぎす秋は月
冬雪さへてすずしかりけり

別府の景色をこの雪月花に重ねてみると、そこには「ゆけむり」が欠かせない。花にゆけむり、月にゆけむり、雪にゆけむり、更には、時鳥の鳴き声とゆけむり……。

このようにゆけむりは四季折々に欠かせない風情をもっている。

平成4年夏に発足して17年、湯けむりに加えた季節の美しい俳句が年間最優秀句として選ばれ、句碑建立されつづけている。

春眠の夢天国へ湯のけむり	永野忠彦
湯けむりの自在にかはす青嵐	小杉優子
新涼の力をもてる湯のけむり	中畑耕一
ゆけむりの中の停車場冬ぬくし	菊地輝行
いつか来た道ゆけむりとつくしんぼ	野木俊介
一ゆらぎして万緑へ湯のけむり	西山昌子
湯けむりのレトロの街に小鳥来る	森田里華
ゆけむりの消ゆる空より風花す	押谷 隆

また市制80周年を記念して

ゆけむりの風と遊べる小春かな	倉田紘文
----------------	------

の句が湯けむり展望台に建立された。湯けむり景観と共存共生の里の日々である。

4 鉄輪の湯けむりのある映画シーン（ドラマ）

温泉都市の別府鉄輪を舞台にした情緒溢れる場面がスクリーンにつぎつぎに流れてゆく。ドラマの主人公もまわりの人も湯けむりの中で癒されてゆくの、目に心にひしひしと伝わってくる……。

ここにあげたのは鉄輪の湯けむりの景観が舞台となった映画である。

5人を殺害して逃走しつづける男と、その父との相剋をとおして、人間の原罪と魂の救済を問う物語の「復讐するは我にあり」。鉄輪が主要な舞台であった。

大分を旅する寅さんが、動物園の飼育員をしている気の弱い青年に恋の手ほどきをする物語。湯けむりがほのかな香りを放って安らぐ……「男はつらいよ 花も嵐も寅次郎」。

数々の映画祭でグランプリを獲得した「顔」。内向的な性格の姉が、仲の悪い妹を殺害して大阪から別府へ逃

亡して隠れ住む。湯けむりのある町で、様々な人々との出会いを通じて生きる意味を知っていく物語。しみじみとした心のあり方に湯けむりが添う。「顔」は別府を得て作品が深くなった。

行く道に不安を持つ子どもたちが、湯けむりのある町で自然に癒され、俳句を楽しむことにより正しく育てゆく「秋桜」。豊かな自然につつまれて…。

ある殺人事件を追って東京から男女二人の刑事が鉄輪の旅館で長期滞在……。悲しい事情が潜んでいるが、鉄輪の風景をたっぷり楽しむことが出来る「悲しき天使」。

〈湯けむり景観〉がそれらのドラマを包み込む。



写真9.2.7 映画『秋桜』より

映画の名称	監督	配給	製作年度	出演者	撮影地
復讐するは 我にあり	今村昌平	松竹	1979	緒方拳、三國連太郎、 ミヤコ蝶々、倍賞美 津子、小川真由美	別府
男はつらいよ 花も嵐も寅次郎	山田洋次	松竹	1982	渥美清、田中裕子、 沢田研二	湯布院（湯平温泉）、杵築（養徳寺、 志保屋の坂）、臼杵（石仏、福良天 神）、別府（鶴見岳、鉄輪温泉）
顔	坂本順治	東京テアトル	2000	藤山直美、豊川悦治、 佐藤浩市 グランプリ作品	別府、姫島
秋桜	倉田径文	アジアワイ ドコミュニケーション	2003	杉林沙織、黛まどか、 小西博之 文部科学省選定作品	別府、山香、日出
悲しき天使	大森一樹	松竹	2005	高岡早紀、岸部一徳、 筒井道隆、山本未来、 河合美智子	別府（鉄輪、別府駅）、大分（ビッグアイ、 ホーバー基地）、大分空港

表9.2.1 別府を舞台にした映画
(辻野功 『大分学』明石書房 平成20年刊より)

5 天の香具山は豊後の鶴見岳では？

なんとも面白い話題が飛び込んできた。

春過ぎて夏来たるらし

白妙の衣乾したり天の香具山

『万葉集』（巻1）のこの歌は誰れにも知られている。最近、角田彰男著『炭焼長者・黄金の謎』（原書房 平成21年刊）のサブタイトルには「別府温泉の意外な前史を解く」の文言が記されている。その中で「高天原での香具山が他ならぬ別府湾の背後にどっかと鎮座する鶴見岳（とその山系三山）」と問題を提起している。

また、同じく『万葉集』（巻1）の舒明天皇御製歌

大和には群山あれど とりよろふ 天の香具山
登り立ち国見をすれば 国原は煙立ちたつ
海原は鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島
大和の国は

の歌の香具山を、水野孝夫の論稿「鶴見岳は天の香具山」（『別府史談』第18号）で、この香具山をそのものずばり「鶴見岳」と書いてある。そして「国原は煙立ちたつ」の煙は、別府の湯けむりであり、「海原」は別府湾と推測している。

これらの論述はあくまで推測であるが、もし、そういうことも考えられるとすれば、〈湯けむり景観の湯けむり〉が万葉集に詠われていたことになる。古代の文献に「湯けむり」の言葉が見つからなかっただけに、大きな夢を与えてくれたことになる。

「別府市湯けむり景観」万歳である。

協力してくださった方（敬称略）

安東大隆・衛藤賢史・大野保治・甲斐梶朗・河野忠之・
山下かず子 深謝。



写真9.2.8 湯けむり

〈参考文献〉 第9章

- 安部巖 1987『別府温泉湯治場大事典』 創思社出版株式会社
- 宇都宮則綱 1965『回顧七十年』 河村豊
- 河北倫明監修 1995『伊谷賢蔵画集』 京都書院
- 京都国立近代美術館・京都新聞社 2000『-没後70年記念-小出楯重展』 図録 京都新聞社
- 倉田紘文 1989『別府文学散歩』 別府大学
- 1982『ふるさとを詠う』 大分合同新聞社
- 倉田紘文編 2000『大分文学碑めぐり』 大分合同新聞社
- 是永勉 1966『別府今昔』 大分合同新聞
- 産経新聞大阪本社 1995『二科回顧展 第80回記念』 二科会
- 角田彰男 2009『炭焼長者』 原書房
- 辻野功 2008『大分学』 明石書房
- 藤原新也 2000『鉄輪』 新潮社
- 東郷青児 1999『他言無用』〔人間の記録89〕 日本図書センター
- 内藤洋介 2001『濫造・濫発の時代-解説戦後記念切手』 日本郵趣出版
- 二科七十年史編集委員会編 1985『二科70年史 1946-1984』 二科会
- 別府現代芸術フェスティバル2009実行委員会事務局 非営利活動法人 BEPPU PROJECT 2009『別府現代芸術フェスティバル2009 混浴温泉世界事業報告書』
- 別府史談会 1987-2006『別府史談』 創刊号-第19号
- 別府市 1985『別府市誌』 昭和60年版
- 2003『別府市誌』 平成15年版 第1巻~3巻
- 益田啓一郎編 2009『美しき九州「大正広重」吉田初三郎の世界』 海鳥社
- 松本義一 1984『大分文学紀行』 アドバンス大分
- 吉本秀俊 1986『湯けむりの里』 鉄輪愛耐会
- 湯原公浩編 2002『大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎のパノラマ地図〔別冊太陽〕』 平凡社